

寺田寅彦～定説・思い込み・気になること～（2）

四宮義正

前号に引き続いて寺田寅彦の作品や研究文献に関して、いくつか気になることを書いてみようと思う。

1. 寅彦の好きな色

科学史家で寺田寅彦全集の編集に力を尽くした矢島祐利に「寺田寅彦の好きなダーク・グリーン」という文章がある。（『一科学史家の回想』昭和55年、恒和出版）少し長いが一部を引用してみる。

自慢するわけではないが、全集文学篇の布の色は私の案である。布は朝鮮産の麻を用い、初め当時鷗外全集に使っていた焦茶色こげちやに染めた見本を小林君がどうだろうかというから駄目だといった。そこで私はグレーに少し緑を混ぜた色を考え、それに決定した。これは成功であったと思う。

科学論文集の方は校正をほんの少し手伝っただけであるが、これも表紙の色に私の案を採用されたので、いささか寄与したわけである。岩波書店では初め、田丸先生のローマ字書き『力学』と同じ赤いクロスを考えていた。これは経験ずみで調整も簡単だったのである。私は断固反対してダーク・グリーンでなくては駄目だと主張した。

本ができてから、寺田夫人が小林君に向かって、「主人の好きな色がよく分かりましたね」と言われたそうである。私は、大正の末に先生がこの色のネクタイをして、大学の構内を歩いているのを何度かお見かけした。また理化学研究所の研究室にお訪ねするようになってから、先生が机の上に置いていた本の中からこの色の革製のしおりが出て来たとき「これ、いいだろう、メード・イン・イタリー」だとおっしゃった。

確かに寅彦は緑系の色に好みがあったようで、大正12年7月の『渋柿』に「鶯色うぐいすのネクタイ」という短文を書いている。「無地の鶯茶色うぐいすちやのネクタイを捜して歩いたがなかなか見つからない。東京という所も存外不便な所である。」

矢島が見たネクタイはこれだったのかも知れない。しかし、矢島が拒否した赤は寅彦が最も好きな色だったように思う。

まず明治42年、船旅による欧州留学途上の文章を見て見る。

仏桑華ぶつそうげの真っ赤まかに咲き乱れた門の中で白髪しらの小父おじさんが白シャツ一枚になって植木に水をやっている。（ローマ字文「旅の思い出からカウルン 九龍」）

新ガ坡シンにも彼南ポールにもあった赤い色の咲く合歡樹ベナンはコケシアねむのきという。（日記、明治42年4月18日）

ポンペイ迄見物させるという。（略）入場料を払って関門を入ると、もう二千年前の昔である。Theatroの広場に赤い虞美人草とりかぶとと鶏冠とりかぶとが一面に咲て居る。（同5月2日）その後の生活でも赤い花のことはよく出てくる。

門の赤いバラが今年是非常によく咲いた、往来の人が賞めて行くのが聞こえる。（日記、大正13年6月15日）

留守の方でも平凡単調なる日が水のように流れて居ます、唯庭一面の雁来紅が燃えるような美しさを日々に展開して居ます。此葉鶏頭の紅色は朱色とはちがつて熱色の中に寒色を含んで居るので私には見て暑い感じがしない、そうして「秋」を感じさせる。(寺田正二、弥生、雪子宛て書簡、昭和6年8月13日付)

帰宅してみると猫が片頬に饅頭大な腫物をこしらえてすこぶる滑稽な顔をして出迎えた。夏中ぼつりぼつり咲いていたカンナが、今頃になって一時に満開の壮観を呈している。何とか云う名の洋紅色大輪のカンナも美しいが、しかし札幌円山公園の奥の草花園で見た^{やりげいとう}鎗鶏頭の鮮紅色には及ばない。彼地の花の色は降霜に近づくほど次第に冴えて美しくなるそうである。そうして美しさの頂点に達したときに一度に霜に殺されるそうである。血の色には汚れがあり、^{けが}焰の色には苦熱があり、ルビーの色は硬くて脆い。血の汚れを去り、^{ほのお}焰の熱を奪い、ルビーを霊泉の水に溶かしでもしたら彼の円山の^{ひげいとう}緋鶏頭の色に似た色になるであろうか。(「札幌まで」昭和7年11月)

昨夕空が真赤に夕栄えした、その時の庭のカンナ葉鶏頭の美しかった事はみんなに見せたいようでした、此等の^{かき}花卉は帰る頃も未だ大丈夫でしょう(寺田正二、弥生、雪子宛て書簡、昭和8年9月1日付)

引用したように、いつも赤いものに目が行っている。作品として発表された「札幌まで」は当然としても手紙や日記でも花が好きな心がよく表れているし描写に詩とロマンがあって何度も読み返したくなる。

友人や弟子との話題にもたびたび赤いものが出てくる。

昔の飛行機の話が出た。寺田先生は明治42年にベルリンにゆかれたが、あるとき飛行競技会を見られた。(略)そのとき先生の印象に残ったのは、フランスのラタム(日本ではそう呼んでいたが、先生はレーサムと云われた)の飛行機であった。赤く塗って形が非常に美しかった、と云われた。(板垣鷹穂「跋一先生と私」『寺田寅彦』)

大正14年の1月のある土曜日のことである。(略)浅沼商店で問題のシャッターを買うのは二、三分で済んでしまう。すると先生はいつも持って歩いておられる風呂敷包みの中から、古色蒼然とした写真器を一つ取り出されて「この写真器は20年も前に独逸で買って来たものだが、××^{センチ}糶に〇〇^{センチ}のフィルムで無くちゃいけないのだ。」

(略)その写真器というのは、蛇腹が赤いものだから益々変わっている。この赤いところがちょっと変わっていますねと誰かが口を出すと、先生は「どうも此の蛇腹では大分軽蔑されるから、今度は一つ黒く塗ってしまう」と云いながら…(中谷宇吉郎「先生を囲む話 25 赤い蛇腹の写真器」『寺田寅彦 わが師の追想』)

自宅の書斎には赤い羅紗張の回転椅子があった(寺田正二「父の書斎」)し、ついには、この趣味が高じて別荘の屋根にまで採用してしまう。

大正12年、当時まだ旧い武蔵野の面影の残っていた志村中台の遠く荒川を見透かす高台の一角に赤瓦、クレオソート塗の小家を建て、週末の生活を送った事など懐かしい思い出である。(寺田東一「父の追憶」)

まったくの田舎に突然赤い瓦屋根の別荘を見た付近の人々はさぞ驚いたことだろう。日記にも「新築の赤屋根が意外に遠くから見える。」と書いている。(大正12年1月4日)

また英文科学論文「椿の花の落ち方に就て」(矢島祐利訳)では実際に理化学研究所の庭に椿を植えて落ちる様子を2年にわたって観察しているが昭和6年は赤い花の木が3本、白いのが1本となっている。八重か一重の区別はともかくとして物理的には関係ないと思われる色まで記載しているのが如何にも寅彦的である。この論文については「俳諧瑣談(七)」で第五高等学校時代に俳句に熱中したことを回想して、河東碧梧桐の句「赤い椿白い椿と落ちにけり」を引用し、「若かった当時の自分の幻想の中に天に^{ちゅう}沖する赤白の炎となって^も焰え上がったことも事実である。」(昭和9年3月、『俳句研究』)と書いていることとの関連が思い浮かぶ。

好みの色について、より直接的には『柿の種』『椽の実』を出した小山書店社長、小山久二郎の証言がある。

装幀について話している時に「僕も年寄になったのだから赤いネクタイをつけたいと思って昨日買って来た」などとおっしゃるのを聞いて、何か装幀と関連しているような気がしてならなかったなどと思出す。(小山久二郎「ネクタイ」(『Books』No.23 昭和27年3月号)

とても全部は書ききれないが、自分が大好きな夏を思わせる、情熱的な赤が気に入っていたのだと思う。

全集科学篇の赤色装幀は見てみたいような気もする。師の田丸卓郎と同じというのも魅力的である。しかし大判であるし派手過ぎるかもしれない。結果的にダーク・グリーンの現行色が落ち着いて良かったのだろう。また矢島が書いているように全集文学篇の装幀色は版を重ねてもグレーに少し緑を混ぜた色だったが、平成8年に刊行が始まった新編集の全集では焦茶色の布装幀になっている。ここに至って岩波書店は最初の提案色の願望を遂げたということかもしれない。

2. 小津神社の石橋について

寅彦のゆかりを書いた文章にはよく小津神社が取り上げられている。寺田家はその氏子であった。寅彦が病気になった少年時代に父が平癒を祈願し、回復した折に寄進した石灯籠、石橋が残っているし玉垣には寺田寅彦と刻まれている。明治25年7月6日の寅彦日記にも記載がある。「本日ハ後期定期試験ノ初日ナリ。此日ハ算ト理科トナリ。胸ヲドキツカセタ程、六ヶ敷カラザリシ。此日小津神社ニ石灯籠ヲ献ズ。」

この石灯籠の刻印はすぐ目につくが石橋の刻印は探しても簡単には見つけることができなかった。普通は親柱にあると思うのだが、地面に近い^{じふくぶ}地覆部(縁石)に陽刻されており^オ磨り減ってかなり見にくくなっている。おまけに文字のところの間柱(束柱)が立って字を隠している。たぶん一部材料を再利用して造り替えられたのだろうが心無いことである。書かれている文字は、拝殿に向って左側が「寺田利正男寅彦」、右側が「明治廿七年十月吉祥日」である。諸家の解説で明治二十六年と書かれているものを見かけることがあるが廿七年が正しいようである。「奉納」の文字は見えない。